

「信濃教育」1386号(平成14年5月号)に、「I先生とY君との出会い」という文章が掲載された。書かれたのは当時四賀小学校教諭の小林博先生(現小井川小学校長)である。

ある出あい

I先生とY君との出会い

小林 博

一 I先生との出会い

教師になって二校めに赴任したのは、飯田・下伊那地方の大規模校、A中学校であった。教務主任のI先生との出会いは、実は、自分が教育実習生のとき、社会科の研究室で指導いただいたのが最初であった。当時、実習生でも研究室でタバコを吸えるとあって、「いい気」になっていた。ある日、我々が、掃除開始の音楽が流れたので、タバコの火を消そうとしたときである。

「掃除が始まるというのに何をしている！」と、I先生に一喝された。実習生の背筋がビツとなった。注意を受けたのは当たり前であったが、不思議とその余韻がさわやかであったのを覚えている。

それから五年の後、私は教師として、I先生と同じ職場で働けるのを、とても楽しみにしていた。同時に、I先生の「叱り方」の秘密に学ばせていただくことになるのであった。

二 Y君との出会い

前任校が山間へき地校で、全校生徒三十人前後の小さな中学校であったためか、生徒数の多さに戸惑う自分は、受け持ちの二年生のクラスの子どもたちと、思うように気持ちを通わせることができなかつた。中二の後半ごろから、二学年を中心に、いわゆる「荒れた生徒」たちが増え始め、日々、生徒指導に明け暮れることになった。

Y君はその中の一人であった。中三の一学期には、授業への出席はおろか、生活全般にリズムを崩し、校内を自転車で走ったり、先生にけがを負わせたりしていた。担任としてどうすることもできない歯がゆさを感じた。

三 人をひきつける力

こんな生徒たちでも、I先生の言うことにはすなおに耳を傾けていた。

「I先生は、オレたちの気持ちを分かってくれる」悪さをし、職員室と呼ばれ、I先生の机の後ろに座りこんでいる彼らの表情は、何かを訴える寂しさを漂わせていた。どうしてI

先生は彼らの心をつかむことができるのだろう、ただ叱るだけではない。涙を流しながら話を聞いている彼らが逆にうらやましくさえ思えてくる。

ある日、Y君と私は、ささいなことが原因で言い争った。「きのうもあれだけのことをしておきながら、なぜ分らないのか！」

声を荒げて自分の気持ちを伝えようとする私に、彼は近くにあった物を投げつけて反発した。悔しさのあまり、私は校長室にかけこんだ。ちょうどそこにいたI先生の顔を見たときに、どっと涙があふれてしまい、私は机に伏して泣いた。I先生は、私にこんな話をしてくださった。

「小林先生、職員室の水道の上にかけてある鏡は、何のためにあると思うかな。ふつうは、手を洗ったときに髪を直すためと答えるだろうが、そればかりじゃないんだ。あの鏡は、授業で教室に行く前に、笑顔を作るためにあるんだ。どんなにつらいことがあっても、授業へ行く前に鏡に向かう。子どもの前で授業をするときは、笑顔でなきゃいかん。笑顔を作ってそのままの顔で教室に入ると、子どもははっとするんだ。小林先生の顔は、近ごろ暗くていかん。ごみを拾うに

も笑顔で拾わにやダメだ。子どもはそれを見ているもんだ」

この話をされたとき、今まであれこれ悩んでいたことが消えてしまったように感じた。人のせいばかりではない、自分にもすべきことがまだあると思えてきた。

次の日から鏡の前で笑顔作りが始まった。笑顔でいつづけることは、時にかなりの忍耐を必要とすることも分かったが、不思議とクラスの子どもたちがかわいらしく見えてくるのだった。

四 Y君との別れ

中三の三学期になり、Y君は落ち着いて生活できるようになつていった。志望する高校の受験に向けて勉強を始めた。

そして、卒業式の日が来た。いい卒業式だった。式を終えて教室に戻り、私は最後の話を始めた。担任になってからの二年間の苦しい日々を思い起こしながら。

「みんなはすばらしい力をもっている。自信をもって……」
と言ったとき、Y君と目が合った。何と、彼は涙をいっばいためているではないか。それを見たとたんに話が詰まっちゃった。

「先生がんばれ」

Y君が言った。そのことばで、教室の子どもたちが堰を切ったように声を上げて泣き出した。Y君のことをクラスのみんなが支えてくれていたのだ。ほんとうにうれしかった。子どもたちに何か贈ろうと、前夜必死に書いた色紙をひとりひとりに手渡した。Y君の番になった。彼は私の前に進み出て、
「先生ごめん、ごめんなさい」
を繰り返した。二人は抱き合って泣いた。

子どもたちを見送り、職員室に戻ると、I先生が私に話しかけてくださった。

「最後の別れはどうだったかな」

「おかげさまでいい別れができました」

I先生は、にこっとしてうなずいてくださった。

五 じょうずな叱り方

三年間お世話になったA中学校を去り、私は、出身地である諏訪の小学校に赴任した。その年の五月、I先生からの手紙が届いた。

小学校で気分的に楽にならないよう、中学へ行ったときどうだろうか。ということを考え、児童の人間づくり、学力づけ等にご尽力ください。

先生に担任されている児童は幸せだろうなと思います。

明るく、笑顔を忘れず。

叱るときの留意点、七つほど気づくままに。

① どんなときに叱られるか、前もって子どもと話し合い、明確にしておく。

② 子どものよい点をほめてから叱る。

③ 子どもの性格によって叱り方を工夫する。

④ 子どもの逃げ場を認めながら叱る。

⑤ 感情的に叱らない。

⑥ 叱った後はいつまでもねちねち言わない。

⑦ 心を通じ合わせながら叱る。

禁句・「おまえの顔など見たくない」

・「教室から出ていけ」

・「親の顔が見たいものだ」

今、この手紙は額に入れられ、部屋に掲げてある。折りにふれ、この手紙の前に立ち、きょうの叱り方はどうだったかを問うことがある。I先生とY君と別れて九年になるが、相変わらず自分の叱り方は上達していないことに気づく。そして、いまだに④の意味するところがよく分からないでいる。A中学校であの子たちがI先生を慕っていたのは、そこに秘密があったのではないかと思うにつけ、まだまだ修行が足りないと感じる。

I先生が、最後に私に話してくれたことばがある。

「子どもを叱るときは、口では叱って目は笑う」

究極の叱り方ともいえそうだが、これが何度やってもできない。

現在、Y君とは年賀状で近況を報告し合っている。そのうち機会を見つけて、彼とゆっくり語り合いたいと思っている。I先生とY君との出会いを感謝するとともに、生涯、大切にあなたためていきたい。そして、少しでもI先生の叱り方に近づけるように、子どもたちとともに自己変革していく教師でありたいと願っている。

(諏訪 四賀小)

平成15年に「信濃教育」で出会ったこの文章を私は、ずっと大切にしてきた。どんな学術書より、どんな講演会より、この文章は私の宝物となった。そして15年以上たって（実は、この文章の記憶だけはあって、「信濃教育」が見つからないので、誰が書いた文なのかも、この間不明になっていたのだ）、再びこの文章を探り当てた。そして小林先生に電話をさせていただき、I先生が、板倉恒夫先生だということもわかり、多くのことが合点がいったのである。

今年、学級づくり研究調査委員会では、板倉先生の話をお聞きする機会を作ることができる。是非、学級づくり研究調査委員会の委員を希望される先生が多く現れることを願っている。